

地元のよさ

学校には様々な職種の来客があります。多くは教育に関係ある方ですが、中には教育とは全く関係のない職業の方が来校されます。昨日お見えになった方は、東京にある大手のPR会社の方でした。北中の校舎を世間に発信するということで、北中を設計してくださった設計会社の方たちと一緒にお見えになりました。

彼が普段、学校という場所に足を踏み入れていないということが、次の発言からすぐわかりました。

「生徒さんたちは、どうして私のような者にまであいさつしてくれているのですか。訪問先でこんなにあいさつしてもらったのは初めてでびつくりしました。歓迎されているようで、うれしくなりました。」

公立の学校をPRすることはまずないでしょうから、これまであいさつのシャワーを浴びた経験もこの方にはなかったのでしょう。いつものように訪問先に足を踏み入れた途端、すれ違う多くの生徒たちが「こんにちはー」とあいさつをしたことにびつくりされたのだと思います。そして、それが初めて味わった感動となったようです。

学校というところにどっぶりつかっていると、あいさつが当たり前になってしまい、することもされることも日常の一部に感じてしまいます。こういう方の感動を知ると、学校というところの素晴らしさ、そこで学ぶ生徒たちの素直さに改めて気づかされます。

彼の言葉の中の、「私のような者にまで」という部分に、私は注目しました。彼は、北中の校舎の中では、自分があいさつの対象ではないと思っていたようです。学校関係者ではない自分、生徒たちとは関わりをもたない自分には、あいさつの声はかけられないと思いついてみえたのではないのでしょうか。

東京という大都会は、人とかかわりが希薄です。そんな環境で生活していれば、そう思うのも無理はないでしょうね。しかし、北中の皆さんは、それを見事に一蹴しました。皆さんが日常的にかけているあいさつは、大都会で生活している人の意識を変える力をもっています。いや、それどころか、人に感動を与える力をもっているのです。

皆さんのような若者の中には、都会にあこがれをもつ人が多くいるでしょうね。確かに、都会は便利ですし、刺激もたくさんあります。「行ってみたい」「住んでみたい」という気もちが生まれて当然です。しかし、今の環境の中には、都会では味わえない魅力があふれています。利便性や刺激は確かに少ないでしょうが、その分地元にはしかない素晴らしさがたくさんあると思いますよ。

「故郷は遠くにありて思うもの」という言葉があります。地元のよさは、離れてみるとよくわかります。豊かな自然、おいしい空気だけではありません。最後は「人」です。「人」との関わりが地元そのものです。三年生もそう思うでしょう? 『故郷』を書いた魯迅もそうだったよね。

(十月二十一日 記)